

国語 (その一)

第一問 次の文章を読んで、後の問に答

えなさい。

たとえばドラマの俳優を見ている時、われわれが感情移入しているのは物語世界の主人公なのだろうか、それとも演技している俳優個人のキャラクターなのだろうか。おそらく答は常にその中間にあるのであって、われわれは両者を無意識のうちに重ね合わせながらドラマを楽しんでいる。物語の世界に浸りきると同時に、心のどこかで、その俳優がいかに役柄をふるまっているかを鑑賞し、楽しんでいるのである。「あの俳優も離婚してから演技がうまくなったね……」などと時にA下世話(?)な関心でドラマを見たりするのも、実は物語を背後で成り立たせているB「もう一つの物語」への関心ゆえなのだ。

ここにいう俳優を演じられた「作者」、ドラマの主人公を作中人物に置き換えてみると、これはまさに「小説」の問題でもある。そもそもテレビのスイッチをオンにする(書店に小説を買いに行く)のは自分の好きな俳優が主演している(自分の好きな作家が新作を発表した)からなのであって、これを一概に不純な動機として切り捨てることはできない。個別に黙読している不特定多数の読者を相手にした時、「あの芥川」「あの漱石」が書いた小説である、という「神話づくり」

は、実は近代商業資本下の読書形態として、ある意味では必然的な選択でもあったのだった。

あるいは商品において「ブランド」がどのように立ち上がるのかを考えてみて、もよいだろう。大衆消費社会においては、均一化された商品の間にいかに個別的な差異を生み出し、付加価値を創出するか重要なポイントとなる。その際に商品開発にまつわる苦難の物語、創業者の特異な個性などの「いわれ」やいきさつは、伝説として大きな役割を果たすことになるだろう。小説においてもまた、その小説がどのような経緯で書かれたのか、作者はいかなる人物であったのか、といった^{註1}メタ・レベルの情報、共同性を保証するための大切な手立ての一つにされてきたのである。

おそらくその際に重要なのは、これらが現実の作者とは別に、作品を創るために意図的に演じられ、創り出された「作者」像であった、という事実であろう。たとえば、太宰治に関していえば、自殺未遂をくりかえし、薬物中毒に苦しみながらも自身の弱さから目をそむけず、既成のあらゆる権威に戦いを挑み続けた無頼派作家、というイメージは、実は小説を書くために、あるいは小説を受け取るために、つくり手と受け手とが共につくり上げた伝承世界でもあったのだった。作者はこうしたシグナルを巧みに小説に埋

国語 (その二)

め込むことによって「太宰神話」を発信し、それを背景にさらにあらたな作品を書き継いでいくことが可能になるわけである。

われわれは小説を読む時、ともすれば現実の作者を偶像化してしまいがちだ。たとえば川端康成が孤児として育ったこと、谷崎潤一郎が関西に移住してその文化の影響を受けたこと、太宰治が青森県下有数の大地主の家に生まれたこと……。

こうした個々の事実は「イ」な事実としてむしろ重要な意味を持っているが、仮にそれを前提に作品を説明したとしても、おそらくは環境決定論に終始してしまうか、作者をめぐる「神話」の再生産に荷担するだけで終わってしまうことだろう。

重要なのは作者の「事実」を作品外に特定することではなく、それが小説を「小説」たらしめる情報として内部からどのように発信され、テキストのウチとソトをつなぐコミュニティを立ち上げてきたのか、という経緯を明らかにしていく発想なのである。

ひるがえってみるに、「文壇」という言葉からわれわれが通常連想するのは、実体としての文学者の集合である。けれどもここで発想を変え、この概念を、小説が「小説」として成り立つために表現内に仕掛けられたコミュニティとして捉えてみてはどうだろうか。

たとえば芥川龍之介の『芋粥』(大正五

年)の冒頭部分をあげてみることにしよう。

元慶げんけいの末か、仁和にんなの始はじにあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。

読者は唯ただ、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへみてくれれば、よいのである。(略)

生憎あいにく注₂ 旧記には、それ(注―主人公の正確な姓名)が伝はつてゐない。恐らくは、実際、伝はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等かれらと、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。

この語り手は読者に対し、自ら小説の書き手であることを顕示し、同時代の「日本の自然派の作家」に対する「皮肉な当てこすり」を表白してみせている。読者は冒頭のこの一節から、反自然主義の若手として鮮烈なデビューを果たした「芥川龍之介」の「ふるまい」を感受することだろう。それはいわば、現実の文壇状況とも生身の芥川龍之介とも性格を異にする第三の演技空間にほかならない。^E 共同の伝承世界を構成するために、作者と読者の間に立ち上げられていくこうしたフィクショナルな「場」こそが、この場合の

国語 (その四)

- ① 日本の自然派の作家は歴史的なことに無知であると、あからさまに批判しているということ。
- ② 日本の自然派の作家は作家としての演技的振る舞いが下手である、暗に揶揄しているということ。
- ③ 日本の自然派の作家は自分とは異なった考え方であると、それとなく示唆しているということ。
- ④ 日本の自然派の作家は暗黙のシグナルを文中に示さないと、面と向かって非難しているということ。
- ⑤ 日本の自然派の作家は平凡な人間や話を描いていると、遠回しに悪口を言っているということ。
- 築いた。
- ③ 現代の読書界は、近代商業資本下の読書界とは違い、文学者の集合体である文壇が大きな権力を握っている。
- ④ 作家が創作したフィクション的な世界は現実に起こったことであると思いつつ、読者は読書を楽しむ。
- ⑤ テレビドラマも小説も虚構だと知りながら、視聴者や読者は辛い現実を忘れたくて、それらに没入する。

問六

傍線部E「共同の伝承世界」とあるが、これはどういう世界か。五十字以内(句読点なども字数に含む)で説明しなさい。

問七

本文の内容と合致しているものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 近代小説の読者は、作者本人への関心よりも作品の純粹な鑑賞を通じて、真摯しんしに作者と向き合っていた。
- ② 近代小説は、作中で小説家自身が虚構の作家を演じてみせることで、読者との間にコミュニティを

国語 (その五)

第二問 次の文章を読んで、後の問に答

えなさい。

前章の終わりで私は、今いる場所が苦しくて苦しくて仕方がない人に、^①テンチ療養のススメを説きました。

けれどもこの章では、一見正反対の生き方を提案することから始めたいと思います。それは「今いる場所から逃げる」のではなく、「今いる場所にとどまって、置かれた場所で咲くことを目指してみる」というものです。もちろん本当に今いる場所で生きるのが苦しくて仕方がないのなら、逃げたほうがいいとは思いますが、けれどもそこまでいかないのなら、「置かれた場所で咲く」という選択肢もあります。

あとでくわしく述べますが、「置かれた場所で咲く」ことは「置かれた場所で頑張る」こととはまったく違います。今いる「置かれた場所で頑張る」ことをやめてみて、「置かれた場所で咲く」ことを目指してみたらどうかというのが、この章での私の提案です。

「置かれた場所で咲く」は、私のオリジナルの言葉ではありません。キリスト教の修道者であり、ノートルダム清心学園理事長の渡辺和子さんが書かれた本に、『置かれた場所で咲きなさい』というのがあります。100万部を超えるミリオンセラーになりましたから、読まれた方

も多いと思います。

「置かれた場所で咲きなさい」は、渡辺さんが X としている言葉です。

渡辺さんは修道会の命令で、35歳のときに岡山のノートルダム清心女子大学に^②ハケンされました。そして翌年、2代目学長の^③急逝を受けて、やはり修道会の命令で3代目学長に任命されます。

岡山という慣れない土地で、しかも36歳という若さで思いがけない役職を与えられ、渡辺さんは困惑します。それは渡辺さんが当初考えていた修道生活とはかけ離れたものでした。渡辺さんは修道院を去ろうかというところまで思い悩みます。そんな渡辺さんに、一人の宣教師がある英語の詩を渡しました。その詩の冒頭に書かれていた言葉が「置かれたところで咲きなさい」だったので。

その詩は「置かれたところで咲きなさい」という言葉のあと、次のように続きます。

「咲くということは、仕方がないと^④アキラめることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることによって、神が、あなたをここに植えになったのは間違いでなかったと、証明することなのです」

渡辺さんはこの詩を読んだとき、「どんなところに置かれても、そこで環境の主人となり自分の花を咲かせようと、決心することができ」たそうです。

国語 (その六)

この「置かれた場所で咲きなさい」は、とてもいい言葉だと思います。イ意味の捉え方を誤ってしまうと、たとえブラックス企業のようなひどい環境で仕事をする事になったとしても、「とにかく置かれた場所で頑張りなさい」というメッセージとして読んでしまう恐れがあります。しかし「置かれた場所で咲きなさい」と「置かれた場所で頑張りなさい」とでは、言葉は似ていても意味はまったく異なってきました。

「置かれた場所で頑張りなさい」の場合、私のイメージでいえば、置かれた場所自分ができるべきことは既にシステムによって決められています。だから個人はシステムから与えられたルールに沿ってほかの人と同じように頑張らなくてはいけません。言ってみれば工場の部品と同じです。成績が悪ければ、すぐにほかの人間と取り替えられる交換可能な存在です。

一方「置かれた場所で咲きなさい」は、たとえどんな場所に置かれても、そこで自分らしさを発揮して花を咲かせるというイメージです。そして花を咲かせることによって、その場所に変化を与えられる人になります。その花は、その人にしか咲かせることができないものです。だからその人はその場において、交換不可能な存在であるといえます。**【1】**

たとえばバリバリの成果主義の会社で働いているとするならば、「置かれた場所

で頑張ろうとする人」は、そのなかでトップの成績をとることを目指します。一方「置かれた場所で咲こうとする人」は、ぎすぎすした職場の雰囲気を変えることを目指します。どちらも置かれた場所で精いっぱい生きているという点では同じなのですが、生き方がまるで違うのです。働く職場は同じでも、働く姿勢やマインドが変わってきます。**【2】**

私たちはしばしば「どんなに頑張っても状況は変わらないではないか」という無力感に^⑤オチイりがちです。**【3】**けれども置かれた場所で咲くことを目指せば、状況を変えることが可能になります。「成果主義のなかでトップを目指せ」というシステムから与えられたルールを引き受けずに、自分がその職場で働く意味や生きる意味を自分自身で見つけて、自分の花を咲かせることを目指します。また自分が花を咲かせることで、他人を幸せにすることを目指します。**【4】**

ロ「置かれた場所で咲く」とはどんな場所でもあなた自身の花を咲かせなさいというメッセージであって、自分を殺して忍耐だけで生きると言っているわけではないのです。**【5】**

(上田紀行『人生の〈逃げ場〉 会社だけの生活に行き詰まっている人へ』による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語 (その七)

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字にし、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

確かに与えられているルールのなかで頑張っている限りは、ルール自体を変更することはできませんから状況は変わりません。

問二 空欄Xには、「いつも身边において日常の戒めとすることば」という意味の言葉が入る。それを五字以内で答えなさい。

- ① 【1】
- ② 【2】
- ③ 【3】
- ④ 【4】
- ⑤ 【5】

問三 空欄イ・ロに入れるのに最も適切な語を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

問六 筆者の主張として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① あるいは
- ② つまり
- ③ しかも
- ④ むしろ
- ⑤ ただし

- ① 置かれた場所でとにかく頑張れば、自ずと状況は変化する。
- ② 苦しいときは頑張らず、今いる場所から逃げる勇気を持つことも必要である。

問四 傍線部A「自分らしさを發揮して花を咲かせる」とあるが、これほどようになるといふことか。次の空欄に入れるのに最も適切な語句を、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

□になるということ。

- ③ 神の存在を証明するためには、自分らしい生き方を心がければよい。
- ④ 円滑な人間関係が築ければ、場の雰囲気はいくらでも改善できる。
- ⑤ それぞれの場所で自分を生かすことが、社会を変えることにもつながる。

問五 次の文を本文の本来あった箇所に戻す場合に最も適切な箇所を、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

国語 (その八)

第三問 次の文章を読んで、後の間に答

えなさい。

クリエイティブな対話をするために必要な技、それはほぼ「うまく問いを立てること」に尽きると思います。その問いによって、いままで見えていなかった問題が見えてくるような質問ができるかどうか、ということです。

まず、対話法の元祖ともいべきソクラテスの手法をみてみましょう。たとえば、ソクラテスが青年と行なった対話の記録である『メノン』という本があります。冒頭で青年メノンが、「人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか」とソクラテスにたずねてきます。するとソクラテスは、「君が言う徳とはそもそも何であるか」と問い返すのです。メノンはそれに對して、正義だとか、^①セッセイだとか、いろいろなことを挙げていくのですが、ではそれらに共通するもの、本質的特性はあるのかどうかとまたソクラテスから問われる。こうしたやり取りを重ねるうちに、メノンはだんだん徳とは何かということがよくわからなくなってくるのです。自分は徳を身につけたいと思っていたが、そもそも徳とは何なのか。わかっていたはずが、何となく前提にして

ただけだと気づいたというのですね。

これが^Aソクラテスのいつものやり方なのですが、ソクラテス流、つまり「前提を疑う」ということ、これはデカルトの『方法序説』でも^②トウシユウされています。はたしてこれは確かなのかと、どんどんさかのぼって疑っていく。前提を洗いなおすことで、対話を深めていくわけです。

どんな人が相手でも、対話が深まったときというのは何か「気づき」があるものです。とくに、新しいことに気づくというだけではなくて、思い込みや先入見をゆるがす気づきがあるのですね。ソクラテスもブッダもつねに弟子たちに、対話を通じてそのことを経験させようとしていました。本当にそうなのか、何か違う見方があるのじゃないかと探りながら、これまで持っていた概念や言葉が不正確なのではないかと気づかせていくのです。このときに、たとえばソクラテスなりブッダなりが、対話のなかで「その見方は間違っている」と^③シテキキするのはメなのですね。対話における本来の気づきというのは、AとBが話しているとして、Bの人がAの人に気づきを与えてもらうというよりは、Aの人が投げかけた言葉によってBの人が、「あれを洗いなおしてみたら違うかもしれない」とみずから感じるということなのです。こういう「気づき」がまったく起こらない討論と

国語 (その九)

いうのもありますが、こうなると対話とは必ずしも言えません。

気づきへと至るために、対話の形で^B問いを投げかけつづける。^注今回の〈考え方の教室〉では、その練習をしてみましよう。まずは「問いつづける」練習からです。対話のなかで、それはなぜそう言えるのかをつねに相手にたずねる、さらにもその答えに対してなぜなのか、なぜなのかとどんどんさかのぼって問うていく。

小さな子どもが何でもかんでも「なぜ?」と聞いてばかりいるような感じですが、最初はそれでもいいのです。それを重ねて続けていくと、少なくとも聞かれた方は、自分の思考を洗いなおさざるを得なくなりません。つまり自分で自分の考えをチェックすることになって、それが気づきにつながっていきます。

こうしたソクラテスの対話と同じようなことを、小学校の授業のなかでやってみようとした人がいます。斎藤喜博^{さいとうきひろ}さんという昭和の代表的な教育者で、この方は生徒たちが「当たり前だ」と思っているような常識や何らかの思い込み、それをゆさぶっていくのが授業なのだということをおっしゃっていました。「森の出口」という国語の教材で、「森の出口はどこか?」と生徒に^④ハツモンする。生徒たちは最初、「森と、そうではないところの境目が出口だ」と答えました。それに対して、出口はそこだけだろうか? 先生の

思う答えはそうじゃない、この場合は「出口が見えたところが出口」ではないか? と問い返して「ゆさぶり」をかける。そうすると、先生の言うことは本当だろうか、自分たちは間違っているのだろうか、生徒自身が考えはじめるのですね。

ここで大切なことは、先生が正しい答えを持っていて、生徒がそれを当てにかるのではないということです。先生が答えを持っているのか、本当に正解があるのかどうかもよくわからない。しかし、正解が他にあると言われるよりも、「本当にそうなの?」というゆさぶりをかけられた方が、効果があるのです。今までの既成概念、思い込みがフワツと消えていくのです。

この「フワツと消える」瞬間というのはひじょうに快感で、まさしく目から鱗^{うろこ}が落ちたような、Xがあります。それがわかっていれば、先生がゆさぶりをかけてきたときに、「もうこれが正解に決まっているのに、また考えなおさないといけないのか、面倒くさい」と思ったり、「正解なんて本当はないんじゃないか」と不安になったりするのではなくて、「おっ、またゆさぶりがかかったな」「ゆさぶり歓迎!」とワクワクするような感情が持てる。教室をそういう場にできるかどうか、^c〈ゆさぶり教室〉をつくれるかどうか、そこが大事なのです。

もちろんこれは小学校教育だけの話で

国語 (その十)

はありませぬ。つねに自分の前提や思い込みにゆさぶりをかけてみるというのは大人にとつても重要な訓練です。「ゆさぶられる快感」にめざめると、考えることが楽しくて仕方がなくなる。「ゆさぶり」によって、既成の概念を^⑥クダク、^⑦概念クダキ」は、やり方によっては遊びにもなります。

授業ではなく対話のなかであっても、お互いにお互いをゆさぶるような問いとというのは、必ずしも攻撃的なものではありません。攻撃というのは自分の立場を決めておいて、相手の立場もこういうものでしよう決めておいて、そこに向けて批判していくことだと思います。そうではなくて、「もしかしたらこういう

Y もあるのでは？」という投げかけなので、それは互いに新しい「気」に向かう話し方なのです。

(齋藤 孝『考え方の教室』による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

注 今回の〈考え方の教室〉 この文章の出典である『考え方の教室』には、全部で十六回の「考え方の教室」が展開されているが、その第十回目が「今回」である。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「ソクラテスのいつものやり方」とあるが、「ソクラテス」はどのような「対話」を行うのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① ソクラテスは、相対的な視点を疑うような対話を行う。
- ② ソクラテスは、俯瞰ふかん的な立場から考えるような対話を行う。
- ③ ソクラテスは、傍観者の態度が崩れるような対話を行う。
- ④ ソクラテスは、自律的な懷疑が生まれるような対話を行う。
- ⑤ ソクラテスは、合理的な結論が導かれるような対話を行う。

問三 傍線部B「問いを投げかけつづける」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 問いを投げかけつづけることが、真の正解へとたどり着く方法だから。
- ② 問いを投げかけつづけることが、人間性を取り戻す手立てだから。

国語 (その十一)

③ 問いを投げかけつづけることが、子どもにとっては学習の始まりだから。

問七

本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

④ 問いを投げかけつづけることが、自己の思考を吟味する契機だから。
⑤ 問いを投げかけつづけることが、討論を対話へ変化させる方法だから。

① 思い込みや先入見をゆさぶることとで、おごりをなくして素直にさせるのが、よい質問である。

② 立場が明確になり、相手との違いが分かり、議論がかみ合うようになるのが、よい質問である。

③ 空欄Xに入れるのに最も適切な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

③ 一方的に問いたただすのではなく、相手の言うことにも十分に耳を傾けるのが、よい質問である。

① 目がかすんだような閉塞感
② 目がくらんだような幻惑感
③ 目が開かれたような解放感
④ 目を奪われたような陶醉感
⑤ 目を丸くしたような驚愕感

④ 攻撃するだけではなく、考えることが楽しくなるように仕向けるのが、よい質問である。

⑤ これまでの前提の再検討を促し、何らかの気づきをもたらすが、よい質問である。

問五 傍線部C「へゆさぶり教室」とあるが、ここでは生徒にどのようなことが起こるのか。本文中から二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 空欄Yに入れるのに最も適切な語を、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 可能性
② 現実性
③ 普遍性
④ 相対性
⑤ 差異性